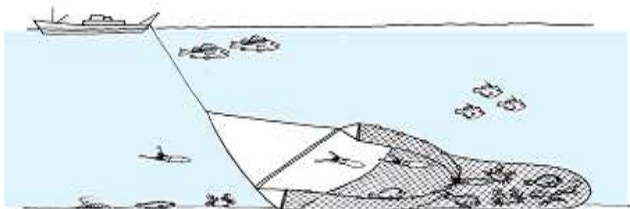


<ふるさと下津井>

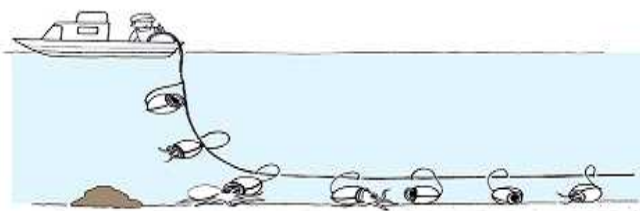
漁師の町

私の生まれは岡山県の南端、瀬戸大橋の出発点・下津井。元は学生服の町として知られた児島市だったが倉敷市の合併されてしまった。

私の家も祖父の時代から漁師だった（それ以前のことはいったことがないが遠い祖先は瀬戸内海の家賊だったとか？）。今では漁業も社会保険その他の関係もあって会社経営となっているらしいが、私の子供の時代は個人所有の小型漁船で親子（父と長兄）二人で底引網（トロール漁法）で生計を立てていた。私も小学校6年の時の夏休みは1ヵ月間船に乗って小豆島北側の漁場と旭川をさかのぼった岡山の魚市場を往復する毎日をすごした。夕方魚市場の船溜を出発して暗くなる頃に漁場につくと網を入れる準備に取り掛かる。2～3時間ゆっくりと引き、網を上げるとえび、鯿、カレイなどがあがってくる。3回ほどこれを繰り返して明け方早く魚市場に向かう。そして朝飯をとってひるまで睡眠。その間に学校の宿題や買い物なども済ませる。



父は時にはタコ縄漁もやった。タコつぼを数百も縄にくくりつけて海中に投棄、数日後にこれを引き上げると穴に入って暮らすタコの習性からつぼに入ったタコが上がってくる。タコ縄の両端には流されないように錘の石をくくりつけてあった。しかし海中に沈めたタコ縄の端っこを探し出して小さな錨で引っ掛けて手繰りよせるのであるが、広い海原で海面に印など見えるはずがない（もし印がつけてあれば他の漁師が横取りしてしまう）。当時はナビゲーションシステムなど無かったから、漁師は「島を見る」というが広い海原で「ここに沈めた」その地点がわかるのである。そしてそのとおり錨を引くと縄が上がってきた。これには私もいつも驚かされた。



ときには違法操業・密漁も

下津井の漁師はどの家も「その日暮らし」の状況で時には操業中に大型貨物船に衝突される事故も起きた。また当時から強力に進められた「水島コンビナート」の埋め立て造成工事で海が汚れ漁場が破壊された。なかには法律で禁止されている漁法で魚を取る漁師もいた。私の家でもこの違法漁業を手がけざるを得なくなった。それが「ひっかけ」「文鎮こぎ」といわれる密漁の漁法だった。4本の太い針金をU字型に曲げ鉛を型に流し込んで「すまる」をつ



くる。写真は鮎のひっかけに使う道具だが「すまる」は白い部分が人の握りこぶしくらいで重い。針も太目の釘くらいある。それをヤスリで鋭く研ぎすます。

その「すまる」を100個ほど太いワイヤーに等間隔に結びつけ、ワイヤーの両端を20mくらいの長さの口コをつけた鉄棒に固定して、この鉄棒を海底に投げ下ろして船で強引に引くのである。もちろん密漁だから夜の操業だ。そうすると海底に眠っている一切合財の魚がとれる。カレイ、オコゼ、コチ、タコ、貝類、しかしこれほど荒っぽいやり方もない。時には島の近くでこれをやると海底電線を引っ掛けて故障させることなどもあったという。だから海上保安庁の取り締まり船に追いかけられたこともある。

苦しかった生活

漁師生活は楽ではなかった。我家も（どこの家もそうだったが）借り食いで付けは新聞代、電気代、食料品など1～2年分は当たり前だった。借金取りは年末、だから私の家では年末は留守にして唐琴の祖父の家に行って正月を迎えるのが毎年のことだった。やがて漁師は廃業、父と母と長兄は燃糸業の請負などにも手を出したが家計は一向に楽にならなかった。私は5人兄弟の3番目。長兄が高校進学を諦めて次兄の倉敷工業高校進学を支えた。その次兄が就職をして私の大学の学費を出してくれた。だからいまだに兄たちには頭が上がらない。長兄は6歳年上、中学生のころからラジオが好きで、トランジスタラジオの組み立てなど得意だったが、その後大型特殊免許を取得、現場で働いた。



下津井港と瀬戸大橋